

磨製石斧とならび、今回の調査で多く検出したのが石皿である。出土は第1号・第2号住居跡に限られるが、15点を検出した。これらは、2住-144のような段差をもつて凹部を成するもの、2住-146を例とする緩やかに凹部に至るもの、1住-108で観察できる明確な凹部を残さないものに大別できる。このうち、凹部を残さない1住-110などでは、使用範囲を念頭においたかのように敲打痕が加えられている。また、段差がある1住-111ほかも磨石との接触のみでは成し得ない形態である。これらからすれば、本遺跡の石皿は、1住-112のような周縁に対する打割のほかに、使用面を限定する形態整形が行なわれたことがうかがえる。

その反面、周囲に稜が全周する型がもっぱらで、一方を開放させるなど、使用効率に対する配慮は乏しいように見える。しかし、やみくもに磨り面を限定していたわけではないらしい。2住-143などの大型品では、原材形態に対して斜にこれをおいている。原材のなかで使用面を効率よく配置するならば、普遍的な凹面に符合する扁平な楕円大礫を確保するはずであり、現に2住-142の例がある。したがって、大型品に見られる使用面のかたよりは、原材選択の誤りではなく、平坦部そのものの存在意義、たとえば粉末を留保する海のような機能が追加された結果とも考えられる。

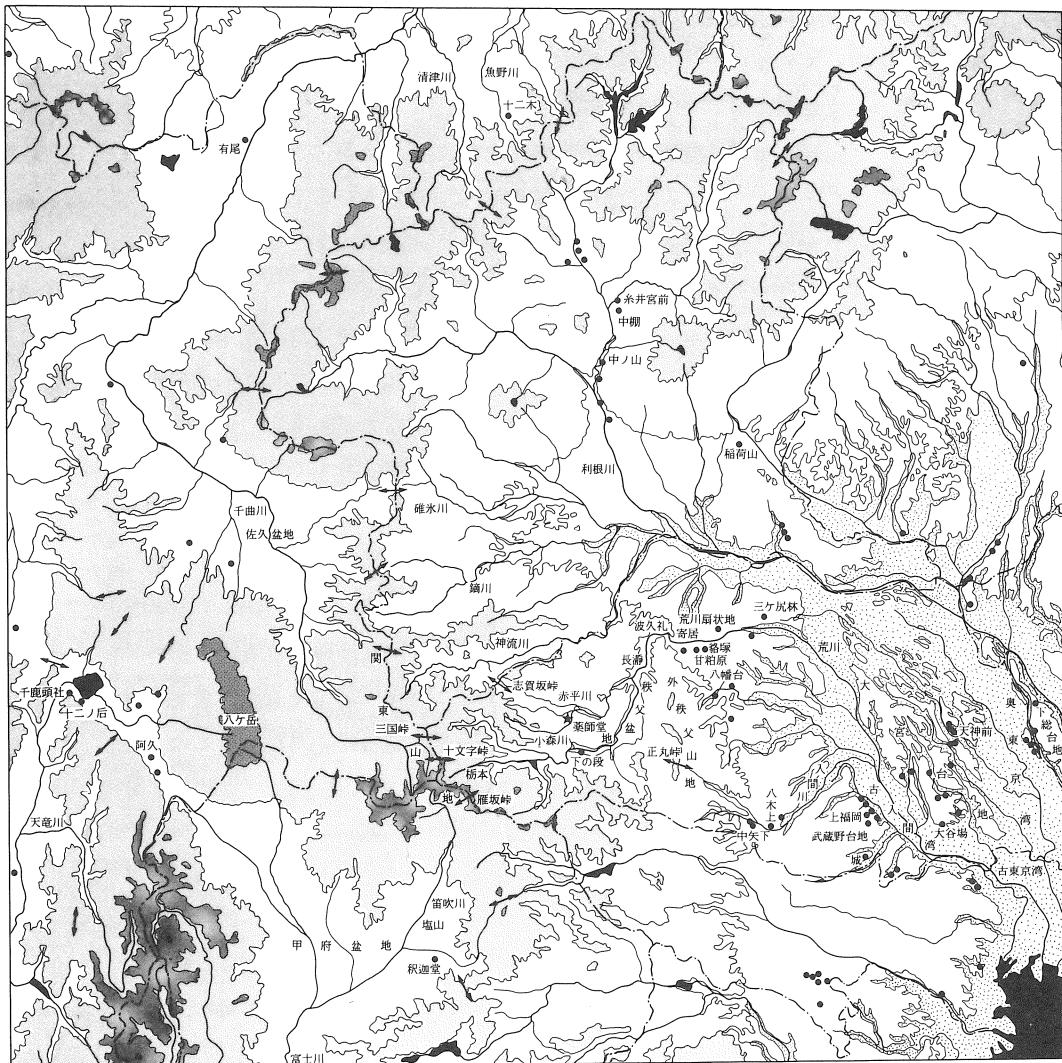
#### 4 薬師堂遺跡にみる地域間交流

薬師堂遺跡は秩父盆地の西に位置し、関東山地の山懐にいだかれた環境にある。関東・中部地方の地図を広げると、行政区画の印象とは裏はらに、意外なほどに山梨県や長野県の東部に近いことに気づく。峠への依存が薄れた現代では考えにくいが、近代までの生活では、峠を越えた信仰・婚姻・林業・商業圏の形成が一般的であった。そして、本遺跡での無織維土器の出土は、縄文時代前期中葉においても甲信と秩父の交渉が活発に行なわれていたことを証明したのである。

遺跡の南約5kmには荒川の本流が刻む深い谷がある。これに沿う国道140号線は、古くは「秩父往還」とよばれ、甲州・信州と北武藏をむすぶ主要路であった。荒川を遡上した往還は、関所跡が残る栃木で二手の尾根にわかれ、一方は十文字峠を経て信州南佐久に、そして雁坂峠をめざせば笛吹川をくだり甲州塩山に至る。近世には秩父から煙草や塩が、信州よりは米や味噌、そして馬がもたらされ、奥秩父の三峰神社は武甲信からつどう代参者でにぎわった。また、甲斐の武田信玄は、北武藏侵攻をもくろみ、重要な物資輸送の経路となる秩父往還の整備に力を注いだという。

もちろん、縄文の人と物資が行き來した道は、後世の主要路とは異なることもあるだろう。それは、信玄が現に大軍を動かした、信州佐久盆地から上毛を経て志賀坂峠に至る「三山越え」かもしれない。しかし、これとても、遺跡の北約2kmの荒川支流赤平川を拠り所としているのである。つまり、いずれをとるにせよ、薬師堂遺跡は縄文の幹線道の間ぢかに位置していたことになる。

関東でいう黒浜期において、これまで両地方をつなぐ主要な経路と目されていたのは利根川、碓氷・鏑川、荒川流域である。なかでも利根川上流では、自動車道や新幹線の建設に先立つ一連の調査で大きな成果が得られている。しかし、中部側の新潟県清津・魚野川流域での報告例は塩沢町十二木B遺跡（佐藤1987）くらいで、以遠の飯山市有尾遺跡（金井1982）をふくめても、空白はおおいがたい。また、碓氷・鏑川流域は秋池・新井の成果（秋池・新井1983）があるものの、本格的な調査例がない。そして、荒川流域も本遺跡の79年の調査が唯一の報告例であった。



第39図 西関東・東甲信における同期遺跡の分布

この期における関東・中部の交渉の実態に関する論議は、近年の利根川上流域での調査成果によって、にわかに現実味を帯びてきた。とはいものの、題材は土器、それも大型菱形文土器の出自にかたよりがちで、石器やその他については等閑視されているのが現状である。

第39図には本遺跡を中心とした関東・中部の境界地と、現代に伝わる峠の位置、そこに分布する同期の主要遺跡をあらわした。ここからは、薬師堂遺跡が中部との交渉経路の選択肢に恵まれていることを理解できよう。峠が歩行や文化伝播の障害とならない往時では、甲府盆地や八ヶ岳山麓への行程は、大宮台地へのそれと、さして変わりはなかったろう。そして、そこには釈迦堂、阿久、十二ノ后、千鹿頭社（小林1974）など、富士・天竜川上流域の主要遺跡が分布している。

同地で主体的な無織維土器は、薬師堂の各住居でまんべんなく出土している。これらは、胎土分析と肉眼観察のかぎりでは、搬入品として認めるに充分な特徴を備えている。細かな時期による出

現率の変動が少ないことは、本遺跡の展開期に秩父を経路とした中部・関東間の交渉に大きな変化がなかったことを示している。むしろ、この数値は継続的な交渉を保ち得た薬師堂遺跡の地理的、そして遺跡が所在する秩父地域の地域的特徴を浮き彫りにするものと受けとめられる。

今回の調査により、縄文前期中葉の中部から関東平野に至る経路にひとつの確証が生まれた。そして、さらに極めるとするならば、この土器群の生産地が問題となる。薬師堂での二回の調査を通じ、甲州に特産で、しかも同地の縄文遺跡に多く見られる水晶は出土していない。ところが、石器原材料に在地産選択の性向が強いとしても、信州産の黒曜石は移入されているのである。一縷の根拠を誇張するならば、雁坂峠を経由した甲州より、十文字峠、あるいはやや北の三国峠を経由した八ヶ岳東麓との交渉が有力となる。また、これには、遺跡の南北に想定される主要路をとらずとも、直下の小森川に沿うように尾根をひとつ越えて三国峠に至る最短経路も想定できる。

いずれにせよ、関東における現在までの発見地からして、無織維土器は甲信地域から南西関東に搬入・技術伝播されたもので、同じ西関東でも北西方面には到達しなかったと見るべきだろう。そして、その行きつく先は古東京湾域であったはずである。

もっとも、その後、荒川をくだるにしても、長瀬から寄居にかけての両岸は近代の開削により活況を得たのであり、波久礼（はぐれ）の地名が示すように、以前は通行の難所であった。もし、急峻な谷沿いの難所を避け、古東京湾域との交渉を求めるとするならば、国道299号に沿いながら外秩父山地を正丸峠で越え、入間川上流をくだり古入間湾や奥東京湾に到達することも考えられる。これは、「秩父甲州往還」（埼玉県教育委員会1990）にほぼ相当する。加えて、現在までに無織維の釀迦堂Z3式土器が出土した関東の3遺跡が大略この経路のかたわらに分布しているのである。

ところが、土器の搬入は継続される反面、薬師堂の織維土器には、これに影響されるところが微塵もない。豊富で、しかも器種に共通する山岳地に特徴的な石器群とともに擁しながら、両地域のあいだでは土器の製作と組成に関東山地の壁がなそびえたっているのである。

これは、両者の母体となる土器の製作体系がそもそも異なることが主因だろう。諏訪から甲府盆地では、前期初頭中道式の成立以来、確固たる精製系土器の型を生みだせず、近畿・東海・関東の土器群でこれを補完しつづけた地域性がある。それに加え、無文尖底土器を粗型にしつつ、関東の縄文施文手法を取りいれ、在地粗製系として成立した無織維縄文施文土器が、他に影響力を行使できるような下地が存在しなかったのも事実だろう。はからずも、薬師堂での共伴は、土器の影響関係と交易の平等性が、必ずしも一致しないことをも証明しているのである。

さらに、両土器群の隔たりは、本遺跡への流入経路に共通性がないためとも推察できる。現在までに集積された資料で見るかぎり、本遺跡のような大型菱形文土器は、古東京湾域では主体とはなり得ない。逆に、大宮台地に多い貝殻文や、下総台地を加えた両台地に繁栄した撚糸文が今回の調査では出土していない。また、本遺跡と一部の時期が重なる比較的近い甲信地域の遺跡でも、大型菱形文土器と、その類似品の出土量はきわめて限られている。したがって、大型菱形文をはじめ本遺跡出土織維土器の大部分は、荒川扇状地や、群馬・埼玉県境を縁どる神流川の上流より技法や個体そのものがもたらされたと考えられる。

そして、この仮定は、少なくとも秩父経路では、成立時はともかくとして、その展開期において

は大型菱形文系土器群に対する中部地方からの影響がなかったことを示している。また、成立時に影響を及ぼすような確固たる地域土器群が、それをこうむった地域をよそに製作の継続を断念したとは考えにくい。つまり、西関東における大型菱形文土器成立の伝播経路は、荒川流域がふくまれず、利根川か、碓氷・鍋川流域に限定されることとなる。

一方、土器に見る現象とは逆に、石器では滞留した要素が秩父の独自性を生みだしたとされる部分もある。今回の調査で出土した乳棒状磨製石斧の数は検出住居割りで各3本、出土住居では5本もある。これは、古東京湾域や利根川上流では比肩なき数値で、甲信地域に伍して見劣りしない。また、石皿も、甲信地域のような掃きだし口を備える型はないものの、遺構割りの個体数や、敲打により恣意的な形態を求める手法は共通し、関東には少ない。加えて、磨製石斧に見られる側縁の湾曲や片側に集中する研磨の省略は、域外の遺跡より顕著にあらわれている。これは、使用時までを細かに配慮する高技術の製作集団とその供給地が至近に存在したことを見出している。

これらがそのままに、秩父地域に起居した磨製石斧製作集団などの独自性につながるかは、今後の資料の増加を待たねばならない。だが、甲信地域との交流が活発化したためか、秩父地域では黒浜期に至り遺跡数が急激に増加する。地域の上昇期における諸要素の集中した流入が、石器の主体性をはぐくんだことは充分に考えられる。

このように、薬師堂遺跡の成果をもとに、甲信地域や荒川扇状地から秩父地域へ、秩父から古東京湾域への経路と交流の一端を復元することができる。さらに、甲信地域、とくに富士川上流域で出土する繊維土器は、東京以南の想定経路に遺跡が少ないと、釈迦堂遺跡の胎土分析資料が片岩をふくむことなどからすれば、多くが秩父地域より拡散した可能性を指摘できるのである。

さらにもうひとつ、本遺跡のほぼ南の荒川本流に面する下の段遺跡では、主体の「黒浜式土器」のほかに、諸磯a期に属する包含層よりマシジミとサザエが出土したという（吉川1986）。サザエが前期の古東京湾で出土した例は、岩槻市諫訪山貝塚（横川1971）における諸磯b期の住居跡内貝層に見られるのみである。また、同じ「りゅうてん科」のスガイをふくめても、蓮田市天神前遺跡のほかは、千葉県関宿町飯塚貝塚（大原1989）、柏市花前I遺跡（田中1984）、流山市上貝塚（原田1986）など、下総台地側に立地する黒浜期の住居跡内貝層より出土している程度である。

下の段遺跡のサザエが無刺型か有刺型かは明らかでないが、典型的な外海岩礁性である後者である場合、前期では内湾から河口部にかけて棲息する砂泥底性の貝類がほとんどの古東京湾域に採集地を求めるることはできない。ここに、無繊維土器をむすぶ経路の延長上で、しかも同湾域を越え、前期中葉の秩父地域にかかる交渉や交易の広がりを想定することもできる。

鉄道や自動車など、現代の移動手段を用いるならば、秩父地域の現状は行きづまりに見えてしまう。しかし、往時はいく筋もの道がここをめざしつつ、交差し、そして拡散していた。山中なればこそ歩む道は限られ、盆地であるがため四方から谷が収束される。名も知れぬ人々の手を経ながら甲信地域よりもたらされる原石や無繊維土器は、秩父のフィルターを経て域内や古東京湾域に拡散したと考えられる。そして、その経路をさかのぼり、海産物や繊維土器、さらには沿岸性動植物をもとにする食料や工芸品が山岳地に流布したことだろう。